



令和3年度
中学生の主張
in
かながわ

記録集 2021

はじめに

今年で43回目を迎える「中学生の主張 in かながわ」は、「少年の主張全国大会」の神奈川県大会としてすっかり定着しています。本年度は、昨年度よりなお続く新型コロナウイルス感染症拡大が懸念される中、「どのようにすれば、より例年に近い形で届けられるか」を軸にした準備が進められました。

中学校では、休校や分散登校、オンラインを活用した新しい教育活動が継続して行われるなど生活様式が変化する中、本年度も熱意があふれ、手書きの温もりのある作品の応募が多数ありました。

9月26日に県立青少年センターで開催された発表大会では、「感染症拡大防止を図りながらも、いかに生の感動を届けられるか」に重点を置き、会場には選出された発表者7名のほか、保護者、5名の審査員、スタッフのみが入室して発表を見守りました。また、審査結果を待つ間のアトラクションについては、昨年度は前日に収録を行い、その映像を上映しましたが、本年度は生の演奏を聴いていただく形へと一歩踏み出しました。そして、多くの方々のご協力により、発表大会は無事終了し、本県の代表として、平塚市立春日野中学校2年の前田乃裕さんを推薦することができました。

発表会では、障がいについての理解を願うもの、ネットでのモラルを問うものの他、それぞれの個性の多様な在り方、効率化・オンライン化が進むことへの危惧や実感を訴えるものなど、様々な題材を、それぞれの生の声で個性豊かに表現していただきました。

中でも、昨年度同様、新型コロナウイルス感染症に関する作品は多く、特に部活動や修学旅行の縮小などについての苦労や悩みの他、オンラインでの活動、それに伴うモラルの在り方など、新しい生き方を模索する内容のものがありません。また、コロナ禍で働くエッセンシャルワーカーへの感謝や、東京オリンピックに対する感動や開催の方法など、感染防止対応について考えた作品や、SDGs、LGBTQに関する内容が多かったことは、今年度の大きな特徴でした。

本記録集には、本年度の発表大会に選出された7作品と、奨励賞に選出された10作品を収録しています。この記録集を通して、中学生の純粋な想いを多くの方にお届けできれば幸いです。

最後になりましたが、本事業の実施にあたり、県内各中学校の関係者の方々をはじめ、ご応募いただいた中学生の皆さん、ご指導に当たられた先生方、そして、ご協力いただいた全ての方々に心から感謝を申し上げます。

令和3年1月

神奈川県立青少年センター館長
兄内 宏

発表大会の様子



発表前のアイスブレイキング



審査員の先生方

発表者のみなさん



内田 匠海さん



枝廣 咲希さん



木下 瑛羽さん



高橋 光さん



藤田 理沙さん



副賞：いぶき会制作



前田 乃裕さん



山崎 咲美さん



作文募集のポスター

アトラクション style-3!



表彰式



神奈川県知事賞



講評 (小番審査委員長)



優秀賞受賞者のみなさん

目次

◆はじめに	1
◆中学生の主張inかながわ発表大会の様子	2
◆作品集	
最優秀賞（神奈川県知事賞）	
心の石 前田 乃裕 平塚市立春日野中学校 2年	5
優秀賞	
言葉にすること（神奈川県教育長賞）	
山崎 咲美 横浜共立学園中学校 3年	6
「非効率」を選ぶ（神奈川県福祉子どもみらい局長賞）	
枝廣 咲希 神奈川県立相模原中等教育学校 3年	7
毎日を笑顔でいるために（神奈川新聞社賞）	
内田 匠海 平塚市立春日野中学校 2年	8
「書く」ということ（NHK横浜放送局長賞）	
藤田 理沙 神奈川県立相模原中等教育学校 3年	9
「あたりまえ」を「ありがとう」（テレビ神奈川賞）	
高橋 光 鎌倉市立深沢中学校 3年	10
リンゴの木（神奈川県青少年育成アドバイザー連絡協議会会長賞）	
木下 瑛羽 横浜市立戸塚中学校 1年	11
奨励賞（神奈川県立青少年センター館長賞）（50音順）	
背景、いろいろ	
江夏 悠真 横浜市立大綱中学校 3年	12
魔法の言葉	
大野 瑛万 平塚市立春日野中学校 3年	13
「誰か」を「自分」に	
木村 玲菜 横浜共立学園中学校 3年	14
「男性ですか、女性ですか」	
栗原 沙和 横浜共立学園中学校 3年	15
わたしは私になりたい	
小泉 天佳 神奈川県立相模原中等教育学校 3年	16
なくなってほしいこと	
桜田 璃央 伊勢原市立山王中学校 3年	17
二人の私	
下田 葵 相模原市立上溝中学校 1年	18
僕が感じたこと	
谷 淳広 慶應義塾普通部 1年	19
織りなすグラデーションの世界	
古谷 葵 横浜市立大鳥中学校 3年	20
「見えない傷」	
ヤマノ アドリアナ 伊勢原市立山王中学校 2年	21
<参考> 「第43回少年の主張全国大会～わたしの主張2021～」内閣総理大臣賞受賞作品	
岐阜県 養老町立高田中学校 3年 細木 士禾	22
◆実施概要	23

最優秀賞（神奈川県知事賞）

心の石

平塚市立春日野中学校 2年 ^{まえだ}の^ゆ前田 乃裕



言った言葉は砂に書いた文字、言われた言葉は石に刻まれた文字。皆さんは自分の一回一回の発言について考えたことがありますか。

私は最近、SNS のコメント欄に書かれる誹謗中傷を見る回数が増えてきたような気がします。それはなぜでしょうか。そう考えた時、私は便利になった世の中と新型コロナウイルスが原因だと思いました。

私たちにとって今の世の中はとても便利です。スマホを使い、指一本で数多くのことが出来ます。でも、その一方で指一本で相手を傷つける言葉を簡単に書き込めるようにもなりました。人は強くありません。直接は勇気がなくても言えないようなことが簡単に言えるようになる時、人はそれを利用するのです。簡単だから、自分が書き込んだとは分からないだろう、と。簡単な分、直接言う時より言葉を選ばず、思ったことをそのまま言えます。ムカつく時、自分の意見を言いたい時があるのは当然です。今は、新型コロナウイルスという目に見えない敵のせいで我慢などが多いと思います。今までの生活から大きく変化したことでストレスも多いと思います。心も体も常にコロナに警戒し、疲れてしまうと思います。でも、いくらコロナに苛立ってもそれをぶつけることができない。だから、溜まっていくストレスをぶつけられるのが人だと勘違いしてしまうかもしれません。でも、そんな時すぐにスマホを手取るのは違います。一度立ち止まって考えてみてください。自分は全てを知っているのか。第三者の自分が言うことなのか。自分がその人だったらどうか。SNS は人が苦しむためにあるわけではありません。人が楽しむためにあります。その楽しさに目を向けてみてください。楽しさに時間を使ってください。誰かを苦しめることに時間を使うのがもったいないということに気づいてください。顔が見えず感情も分からない人から受け取る文字が与える怖さは皆知るべきです。これは SNS だけではありません。私は小学四年生の時、陰で悪口を言われていたことがあります。その時私を傷つけたのは「うざい」という一言でした。それから四年が経っても、その一言は忘れられません。友達と話していても、この人にも同じこと

をまた言われるのではないか。そう思うと人を信じたり頼ることが簡単にできなくなりました。まるで石に刻まれた文字のようでした。たった一言が人を傷つけるのです。時には命だって奪う力になってしまうのです。

予想もしていなかった言葉に傷つくことは誰にでもあります。自分は何もしていなかったら余計になぜだろうと考え、苦しくなってしまうかもしれません。でも、自分は世界でたった一人です。同じ人はいません。だから堂々としてください。自分を大切にしてください。人には家族や友人など愛してくれる人達が必ずいます。これから見つけることもできると思います。傷ついてもその光を自分で隠すことは絶対にしないでください。また、自分を傷つけたり、命を落としたりも絶対にしないでください。たった一つの命です。命を落とす前の感情が苦しい、辛いなどになるのはもったいないです。楽しいことをたくさん見つけてください。

最初に書いた、言った言葉は砂に書いた文字、言われた言葉は石に刻まれた文字。この言葉を国語の先生から教わった時、私は良い方にも捉えられると思いました。感謝された時、褒められた時など何気ない一言で言った側は覚えていなくても、言われた側は嬉しい記憶として心の石に刻まれます。そんな温かい言葉が皆の心の石に刻まれるといいなと思います。言葉たった一つが人を傷つけます。私の主張で SNS の使い方や発言を意識する人が一人でも増えたら嬉しいです。誰もが生きやすい世の中になることを願います。

優秀賞（神奈川県教育長賞）

言葉にすること

横浜共立学園中学校 3年 ^{やまさき}山崎 ^{さくみ}咲美



「上手く言葉に出来ないけれど。」

こんな言葉を使ってはないだろうか。言葉に詰まった時つい私はこの言葉に身を委ねてしまう。自分の思ったことを言語化することは簡単なことのように思えて実はとても難しいことだと思う。例えば、友達と会話する時はどうだろう。話している相手は目の前にいるはずなのに、伝えたいことは頭では浮かんでいるのに、何故か上手く心を通わせることが出来ない。それが原因ですれ違いが生じてしまうことも少なくないだろう。実際に私もそのような経験を小学生の頃から何度もしてきた。その度に「言葉とはなんて厄介なものなのか」と思ってきた。

中学生になって古典を学ぶようになり古文を通して昔の人の物事の感じ方や考え方に触れる機会が増えた。驚いた。言葉は時代を超えて残り続けるものだった。多くの人に馴染みの深い清少納言作「枕草子」を例に挙げて考えてみよう。冒頭、「春はあけぼの」では「やうやう白くなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる」と著者が春の夜明けの良さを丁寧に書き連ねている。私は胸を打たれた。読んでいてだけで頭の中で情景がはっきりと想像でき、あたかも自分がその場にいるような感覚になった。平安時代中期の随筆が21世紀の今も教科書に掲載されるほど語り継がれているのは著者に共感した人や、私のように綴られた言葉、日本語の美しさに感銘を受けた人が多くいたからではないだろうか。情景が想像できるということは著者が見たこと、感じたことを言語化出来ているということだ。だからこそ私は共感を抱き胸を打たれた。

とは言え、語彙が乏しいままでは思ったことも感じたことも上手く言語化することは出来ない。私は本を読むことが語彙を増やすことへの一番の近道だと思っている。本を読むと単語そのものの知識量が増えるのはもちろん、今まで自分が知らなかった表現に出会うことが出来る。私が出会った中で最も印象に残っている表現は涙が出る

寸前の感覚だ。あの独特な感覚を「鼻の奥がツンとして、迫ってくるものとは反対に乾いていく喉」と表現しているのを見た時には思わず「それだ！」と声を出しそうになった。思ったことを言語化出来たときずっとすごく楽しいし、気持ちがいいと思う。相手に伝わればなお、コミュニケーションの楽しさも感じる事が出来るだろう。

私は、そんな「言葉」が、もっと言えば日本語が大好きだ。同じ内容を伝えたいと思っても人それぞれ表情が変わる、それほど多様な語彙をもつ言語というのが美しく、日本人として誇らしくて。愛も悲しみも感動も。言葉にすることが出来れば人の心を突き動かせる素敵なものだ。日本語を含めた「言葉」という文化は、戦争などの数多の試練を乗り越え決して消えることなく現在まで残っている。忙しなく変わる政治体制や国際情勢に左右されずこんなにも変わらないままに残る。のみならず、人々の日常生活に寄り添っている文化が他にあるだろうか。先人たちが繋ぎ残してきた文化を絶やさぬように未来へと残していくことが今を生きる私たちに託された使命だと思う。その1歩としてまずは、一人ひとりが感情を上手に言語化し日本語を正しく使うべきだ。はじめから達者な言葉遣いをする必要はない。日本語という言葉表現を楽しむことが出来れば自ずと良い方向に向かっていくと思う。

今日も私は日本語を愛している。もっと色々な言葉や鮮やかな表現に出会いたいと思う。ゆくゆくはこの文化を未来や世界に発信していく存在になりたいと考えている。大好きな言葉たちで感動を届けられるように。

優秀賞（神奈川県福祉子どもみらい局長賞）

「非効率」を選ぶ

神奈川県立相模原中等教育学校 3年 枝廣 咲希



毎朝見る電車内の光景はどこか無機質に思える。スーツに身を包んだサラリーマンが、学生鞆を抱えた女子高生が、眼鏡をかけたおじいさんが、そろって手元のスマートフォンを見ている。率直に言えば、私はこの光景が不気味に思える。果たして、電車の中でも仕事のメールをチェックしたり、ゲームをしたりしなくてはならないほど私達の生活には時間がないのだろうか。もしくは、電車で揺られるわずかな時間も無駄にできないほど達成しなくてはいけない何かがあるのだろうか。もちろん電車の中でスマホゲームをしようが、好きな芸能人のSNSを見ようが、それが悪いとは一切思わない。趣味だという人も多いだろう。ただ、たくさんの人がスマートフォンに視線を注いでいる様子は、私には何かに追われているように見えてしまう。

現代、技術は進歩して、昔に比べて多くのことを短時間かつあまり労力をかけずに行うことができるようになった。しかし最近はその、短時間かつあまり労力をかけない、つまり「効率よく」ということが私達の生活を支配しつつあるのではないかと思う。それは大げさだと思った人もいよう。しかし、考えてみてほしい。私達は無意識にでも効率を上げようとしてしまっているのではないだろうか。勉強で採点や重要なことを書く際に赤ペンを使うのは後で見返したときに分かりやすいから、鉛筆ではなくシャーペンを使うのは鉛筆を削る時間、手間を省くことができるからである。これらは日常に当たり前のように溶け込んでいる。

だから私は、あえて「非効率」を選ぶ重要性を主張する。効率が重視される世の中で、あえて「非効率」を選択するメリットは2つあると思う。

1つ目は「非効率」な行動は人間味に溢れていて、その人らしさがあるという点だ。アイデンティティー、存在証明と言い換えることもできよう。わかりやすい話をする、冬の寒い日乗り切るには極論ヒートテックとダウンで十分である。それが求めやすさ・機能性において一番で効率的だから。にもかかわらず私達は非効率的なオー

バーサイズのシャツを買い、穴だらけのダメージジーンズをはく。それにはその人らしさ、個性がよく表れていると思う。街にでて、もし皆同じ格好ならばそれはまるでロボットのようで、そんな世界は実につまらない。

2つ目は世界をより美しく面白くとらえることができる点だ。冒頭の電車内の光景について、スマートフォンを見るのではなく車窓を流れる景色を見たらどうだろうか。非効率的な時間ではあるが何かしらの発見や思い出されることがあると思う。その中で少なからず世界を美しく感じる・面白く思うタイミングがあるはずだ。効率を上げることが優先させていたらそんな機会は少なくなってしまおう。

もちろん、事務作業や医療現場、学業では効率を上げることは必要で大きな意味をもつ。それをふまえてここで提案したいのは、「徹底して効率を上げる時間」と「非効率を選ぶ時間」を使い分けることだ。先ほど述べたような一刻を争う場面やより多くのことをこなさなくてはならない時は無駄を省いて作業に集中する。一方で「非効率を選ぶ時間」は効率を重視するとできないこと、例えばメールではなく便箋を使ってみる、インスタントのコーヒーではなく水出しコーヒーをつくって飲む、あるいは何もせずボーッとするなど。この「非効率を選ぶ時間」の長さが人生の豊かさにつながっているのではないだろうか。

社会は日々変化している。そして今私達はコロナ禍、まるで映画のような世界に生きている。そんな中で「非効率」というのはネガティブに思うかもしれない。しかし一概にそうとはいえない。あえて「非効率」を選ぶのは自分らしくあるためであり、またこの世界を豊かに彩る秘訣でもある。

もし、あなたに明日誕生日の友達がいるのであれば、「非効率」を選んでペンを手に取り手紙を書いてみてはどうだろうか。きっとあなたの気持ちがより伝わるだろう。あえて「非効率」を選ぶことを大切にしよう。そして、変化に満ちたこの世界を、もう一度見つめなおしてみたいかがだろうか。

優秀賞（神奈川新聞社賞）

毎日を笑顔でいるために

平塚市立春日野中学校 2年 ^{うちだ}内田 ^{たくみ}匠海



私達が暮らしている社会は、障がいがある人が暮らしやすいでしょうか。私の答えは「ノー」です。なぜなら、人と同じようにできない、人と違っているということがまだまだ理解されにくいからです。

私は父が笑っている顔をあまり見たことがありません。私の知っている父の顔は、いつも眉間にしわをよせて口を固く結んでいます。その表情は、まるで何かをグッと我慢しているようです。私は幼い頃からずっとサッカーチームに入っています。チームの友達、休みの日になると公園でお父さんとサッカーの練習をしていますが、私は父とサッカーをしたことがありません。寂しいかと言われるれば、寂しいです。しかし、それが当たり前になっています。私が小さい頃の写真には、いつも大きな口を開けて笑っている父の姿が写っています。スキューバダイビングが得意で、世界中の海に潜っている父の写真がたくさんあります。子供と一緒に海に潜りたいという父の夢は、叶わなくなってしまいました。

私の父は、高次脳機能障害です。高次脳機能障害とは、けがや病気をきっかけとして、脳の機能が著しく障がいを受けてしまうことで、日常生活や社会生活に支障をきたすことです。父は、2011年に突然、職場で倒れて救急搬送されました。診断は、過労からくる脳出血でした。母が病院に駆けつけた時には、命の危険もあったそうです。その時、私はまだ3歳で、弟は母のお腹の中にいました。早く仕事に戻りたい、家族と一緒に暮らしたいという強い思いから、父はリハビリに励み、約半年で退院することができました。これでまた、普通の暮らしに戻れると私たち家族は思っていました。しかし、高次脳機能障害を負った父は、今まで普通にできていたことが、難しくなりました。例えば、マンションのオートロックを開けることさえ難しくなりました。他にも、複数のことを覚えることが難しく、ものを忘れることが多くなりました。念願の仕事に復帰した父でしたが、今まで通りの仕事をこなすことはとても大変でした。外見は、今までと変わらなかったため、職場の人は父に今までと同じようにたくさんの仕事を任せました。父は自分の状態を会社に説明しま

したがなかなか理解してもらえず、とてもつらい思いをしたそうです。目に見えにくい障がいのため、他の人からは人と同じようにできないことがあるということが理解されにくかったのです。

社会には、目に見えにくい障がいを抱えている人がたくさんいます。私たちのちょっとした言動がその人たちを傷つけ、孤立させてしまうのです。私たちは、常にいろいろな人がいること、目に見えにくい障がいがあることを理解し行動しなければなりません。そして自分の近くにそのような人がいるとわかったら、相手の心に寄りそいながら、お互いに難しいことはサポートし合える関係を作っていくことが大切なのではないでしょうか。人と同じように出来なくても人より劣っているところがあったとしても毎日笑顔でいられる、そんな社会であってほしいと思います。

今も父は私たち家族のために一生懸命に仕事をしてられています。私は14歳になりました。背も家族の中で一番高くなりました。電球交換は私の仕事になりました。母はとても助かると喜んでくれます。そして10年前に母のお腹の中にいた弟は、サッカーを始めました。私は休みの日に弟に公園でサッカーを教えています。

優秀賞（NHK横浜放送局長賞）

「書く」ということ

神奈川県立相模原中等教育学校 3年 藤田^{ふじた}理沙^{りさ}



この世界には、たくさんのぬくもりであふれている。太陽の恵み、人の体温、日常にある優しさ、そんな美しいものを見てほころぶ笑顔。周りを見渡せば、色んなぬくもりを見つけることができる。そう見渡したあなたの中に、「文字」というぬくもりはあるだろうか。

近年、ICT化が著しく進み、スマホをフリックして文字を打つ、パソコンのキーボードで文字を打つ、そんな光景を至るところで見ると。人々は無機質に指を動かし、ブルーライトを浴びる。彼ら彼女らは文字を「打つ」ばかりで「書く」という行為がどんどん衰退してしまっているように思う。といっても、私も「打つ」ことが多くなっている。メモ帳やカレンダーは紙とペンを選んで書いていたのが、全て「打つ」文字へと変わった。便利性を求め、書く文字が少なくなっているのは事実だ。

しかし、このまま「打つ」文字ばかりが増えてはいけない。なぜならそれは、「書く」文字にはぬくもりがあると思うからだ。たとえば手紙。送る相手を想像しながら紙とペンを選ぶ。そして文章を書き、シールをはったりイラストを描いたりして相手を楽しませようとする。「打つ」ことでもスタンプやフォントは豊富だが、実際に紙を手にして手触り確かめることはできない。直接会って、「おめでとう」とか「ありがとう」などの一言を表情を見ることができない。書いた手紙は、全く同じ大きさの抑揚のない文字ではなく、一つ一つが違う文字で書かれた、人の手のぬくもりを感じるができるものだ。

また、「書く」ということは紙だけではない。家の柱に書く成長の記録。家族にはかかってもらって線を引き、その線は毎年高くなってゆく。大きくなって見返せば、「昔はこんなに小さかったのかあ」とほころぶものがある。学校の机や壁に書かれた落書き。いつ誰が書いたのかは分からないけれど、前に誰かがここで書いたのだと思うと不思議な気持ちになる。書けば、それは単なる情報としてではなく形として残る。時を超えて人と人をつなぐ大切なものとなるのだ。

ここまで「書く」ことの良さについて語ってきたが、「打つ」ことを否定しているわけではない。「打つ」ことがあ

ったおかげで、人は離れていても連絡ができる、新しい友達ができる、0時ちょうどに「誕生日おめでとう」と言うことができる。「打つ」ことなしに私たちの日常は成り立たないだろう。だからこれまでどおり「打つ」文字を使い続ける。ただ、「書く」文字の大切さを再認識して欲しい。

改めて私は主張したい。進化している文明とともに「打つ」文字だけが増えてはいないか。「書く」文字のあのぬくもりを忘れてはいないか。二つの文字を使い分けて、ずっとずっと使い続けて欲しい。そしてたまには、文房具コーナーに入って紙とペンを自分の目と手で選び、いつもすぐ近くにいる人やずっと遠くにいる人に手紙を書いてみたらどうか。それか今までもらった手紙を見返してみたらどうか。

もう一度、周りを見渡そう。そして、ぬくもりを感じ、大切にしよう。書く、その瞬間を、残る、その永遠を。

優秀賞（t v k賞）

「あたりまえ」を「ありがとう」

鎌倉市立深沢中学校 3年 ^{たかはし}高橋 ^{あかり}光



コロナウイルスは、世界に多くの試練をもたらした。また、私自身の考え方にも影響を与えた。

2019年12月初旬に中国の武漢市で第1例目の感染者が報告されてから、わずか数カ月ほどで世界的な流行、いわゆる「パンデミック」に陥ってしまった。また、皆さんがよくご存じの「コロナ禍」と言われる状況は県外移動の自粛、更には学校が休校になるなど、私達の生活の仕方は色々と変化した。テレビを見ていると、感染者がどんどん増えたり、多くの人が亡くなったり、感染しても入院ができなかったり、更には夏休み中の集中豪雨のせいで、悲惨なニュースが増えるようになって悲しく思う。しかし、今なお色々な理由で苦悩する日々が続いている。

少し冷静になって考えてほしい。コロナウイルスは、私達人類にとって、完全に「敵」であって、悪いことばかりもたらすのだろうか。確かにコロナウイルスは憎むべき相手かもしれないが、コロナ禍になってからエッセンシャルワーカーの存在が見えてきたと思う。エッセンシャルワーカーは、私達の生活にはなくてはならない人達なのに、「あたりまえ」の日常に埋もれてあまり目立っていなかった。しかしある日、学校のそばのゴミ置き場で、「いつもゴミを集めてくれてありがとう。本当に感謝しています。」と書かれた張り紙を見かけた。私は、先の見通せない世界に一筋の光が照らされたように思った。「マイナスな面」が、「人々のプラスな行動」に変わったのは、素晴らしいことだと思う。また、同じエッセンシャルワーカーとして働く父も、すごいと思う。

コロナウイルスは、他にもたくさん変化を与えた。例えば、県外移動の自粛によって家で過ごす時間が増え、家族との会話がますます増え、家族と一緒に食事をする時間も増えた。家で読んだり書いたりする時間も増えたので、本や文房具をたくさん買ったりと、お金の使い方も少し変わったりした。コロナウイルスが話題になってから、私は毎日ニュースを見るようになった。ニュースでは、色々な話題に触れるため、自分の将来を考えるきっかけにもなった。最近のこんな自分を見て私は、「コロナウイルスの影響は悪いことばかりではない」とも、思えたりする。

国語で習った詩に、こんなものがある。

「きらめく川辺の光はうつくしいと。」

「おおきな樹のある街の通りはうつくしいと。」

「行き交いの、なにげない挨拶はうつくしいと。」

（世界はうつくしいと 長田 弘）

これを聞いた時、私は長田さんの言う「うつくしいもの」がどれも「うつくしい」とは思えなかった。どれも、ありふれた光景で、「あたりまえ」じゃないか、と思った。しかし、コロナ禍になり、「あたりまえ」にあった生活と光景は、そこにあることが普通ではなかったということに気付かされた。また、何よりも「うつくしいもの」は、私達が過ごしてきた「あたりまえの日々」だということにも気付かされた。今までしてきた挨拶一つ一つが、奇跡であり、「うつくしいもの」だったのだ。長田さんの言っていることが、今になってようやく理解することができた。

コロナウイルスはやっぱりなかった方がいいかもしれないけれど、マスク生活、外出を控える自粛生活、静かな学校、何もかもが「あたりまえ」でなくなったからこそ、気付けたことも沢山ある。これからは、この新しい気付きを大切に、日々に埋もれた「あたりまえ」一つ一つに感謝し、「ありがとう」と伝えられる人になりたいと思った。

優秀賞（神奈川県青少年育成アドバイザー連絡協議会長賞）

リンゴの木

横浜市立戸塚中学校 1年 ^{きのした}木下 ^{えいは}瑛羽



皆さんに一つ、やって頂きたいことがあります。目を閉じてみて下さい。そして、「リンゴ」を想像して下さい。

出来るだけ、繊細で、正確な、「完全なリンゴ」を想像してみてください。想像できましたね？目を開いて下さい。

おそらく、皆さんが想像したリンゴは、赤いつるつるした球体で、上には茶色いへたがあり、もしかすると葉が、また黄色い斑点がついているかも知れません。美味しそうな、赤い実ですね。実です。そう、これはただの「実」です。「完全なリンゴ」と言ったのにも関わらず、皆さんは「実」しか想像しませんでしたよね。「リンゴ」という植物の本体は「木」であり、その「実」は「木」を増やす、単なる手段です。それでも、「いや、『実』のことも『リンゴ』っていうんだよ」と思いますよね。「リンゴ」と言われて、「リンゴの木」を想像する人が居るかという話です。

でも、おかしいと思いませんか？なぜ、本体は木なのに、実を「リンゴ」と、木を「リンゴの木」と呼ぶのでしょうか？明らかに、「実」が優先されていますよね。しかし、マツを「まつぼっくりの木」だなんて言いません。木を「マツ」と、実を「マツノミ（まつぼっくり）」と呼びます。

なぜでしょうか？理由は簡単です。「リンゴ」は食用として利用し、「マツ」は木材として利用してきたからです。つまり、人はその木の使い方を中心に考えたり、呼んだりしていたのです。

木の長い話、お疲れ様でした。この例え話は、次にも繋がります。話の範囲を、社会に広げていきましょう。

今は、世界に様々な問題があります。環境問題、貧困問題、人権問題、紛争、新型コロナウイルス、と無限に存在します。しかし、これらの問題がテレビなどで報道されても、「かわいそうに」「戦争なんてやめればいいのに」「政府もなんとかできないの」など、感想のような意見しか出ません。何か、実行しようとは思わないのです。なぜでしょう？人は、自分に関係ある問題には一生懸命になります。人間関係、勉強、今日のご飯など。でも、遠いどこかでの出来事には気をかけません。自分には関係がないからです。ここで、またリンゴに戻ります。世界の全ての問題、課題を「リンゴ」とします。個人的な問題をリンゴの

極一部の「実」とします。その他の、自分に直接の関係はない、無数の課題。それを、数え切れない程の「葉」や、「枝」などとします。何が言いたいかというと、世界の問題を解決したければ、考え方を考える必要がある、ということ。いつまでもリンゴの実ばかりに気を取られていないで、幹、枝、葉などを中心に考えて、実など小さなものは後回しにしなければいけない、ということです。とはいえ、まだ足りません。「リンゴ」という植物の、「根」の部分が残されています。地上の部分に負けないくらい大きく、いつもは見えません。でも、幹や葉のように、大事な部分です。いくら幹や枝や葉に注目したって、まだ表面を少し削ったくらいです。世界には、貧困や環境の問題という分かりやすいものだけではありません。表に出ていない大きなもの、それはとても複雑で、見えにくいのです。そして、一番、忘れやすいのです。いかがでしたか？どれだけ、いつも自分のことばかりを考えていたかが分かったと思います。SDGsについて少し知っただけで、いい気になっていませんか？集中する、注目する部分をリンゴの実から木に変える必要があります。自分に関係することばかりを考えていても、この世界は良くなりません。何か具体策を考える前にすること。それは、考え方を考えることです。

「リンゴの木」ではなく、「リンゴ。」

「リンゴ」ではなく、「リンゴの実。」

よりよい社会に踏み出す、第一歩。

奨励賞（神奈川県立青少年センター館長賞）

背景、いろいろ

おお、お前喧嘩売ってんのか。とかは思わずに聞いてください。「友達、いますか？」大半の人は、はいと言うと思います。僕にもいます。一応。さらに、帰国生の友達がいる人はいますか。少なそうで、意外といるのではないのでしょうか。僕のような中学生であっても。

僕には帰国生の友達があります。フランスに2年半ほど行っていただけなので、日本語に難があるわけではありません。日本の慣習に戸惑うなんてこともありません。でも彼はよく僕にこう聞きます。「どうしたら成績がとれるの？」と。僕は最初それを聞いたとき、とても驚きました。日本人であれば、それを聞く大半の人はテストの点が振るわない人だからです。しかし、彼は点数が悪いわけではない。しかも塾のテストでもそこそこの点数を取っている。でも、学校の成績には反映されない。それはなぜなのでしょう。聞いてみると、彼は日本の振り返りを書く教育が苦手らしいのです。何を書けばいいのかが分からない、とも言っていました。僕は、後頭部を打たれたような衝撃を受けました。なぜなら、僕はそれを苦手だとは思ったことがなかったからです。半ば慣習的に振り返りを書く癖が、僕には出来ていました。と、同時に、フランスはどうだったのだろうかとも思いました。

調べてみると、フランスの内申点一要素に成績は完全にテストや学業の良し悪しだけに基づいているようです。日本のような学習の態度等は、全くといっていいほど盛り込まれていません。さらに、日本での入試に当たるバカロレア（卒業試験）では、内申点が全体の4割を占めています。（ちなみに日本の平均は3割ほど。）一見、内申点の重みを感じるとは思います。ですが、これは裏を返せば、当日にかかる重みを日々の学習や実力で減らすことが出来るということでもあるのです。つまり、フランスの教育では、学業のみで評価されるわけです。なので僕の友人の彼は学習態度的なものを問う日本の教育に難があったのだと思います。

ところで、日本の教育システムがどれぐらいの間変わっていないかご存じですか。ふむふむ…。10年？20年？いろいろ想像するとは思いますが、答えは150年くらい

横浜市立大綱中学校 3年 ^{えなつ}江夏 ^{ゆうま}悠真

です。学制が発布されたのが1872年ですから、そこから変わっていないことになります。一方フランス。ここは本当にしょっちゅう変わります。例えば、最近学習指導要領が数年ぶりに変わりました。これは異例のスピードです。日本が変わるのは10年に一度です。フランスは常に教育の課題を見つけ、良い方向を目指そうとしているわけです。ここまで話すと、じゃあ、日本もフランスに合わせろってのかよ、文科省に喧嘩売ってんのか！という声が聞こえてきそうです。しかし、僕が今回言いたいのはそういうことではありません。ここで話を戻しますが、最初の質問です。友達、いますか？…いや、「いろいろな友達がいいますか？」という質問です。色々な友達がいればいろいろな経験、見方、考え方を知ることが出来ると思います。日本とフランスの教育だってほんの一例にすぎないと思います。さらに、僕が思う大切なことがもう一つあります。それは「背景を見てあげる」ということ。帰国生の彼や、勉強が苦手な子。一見すると、「出来ない子」です。けれども、みんな一人一人の人間でそれぞれに背景があります。レスポンスの早さを求められる今だからこそ、じっくり話を聞いてみてはいかが？と、いうより、「違いはあるよね」でいいんじゃない、という中学生の主張です。

奨励賞（神奈川県立青少年センター館長賞）

魔法の言葉

平塚市立春日野中学校 3年 ^{おおの}大野 ^{えま}瑛万

「ありがとう。」私たちにとって一番身近な言葉で、言われたら嬉しくなる言葉。私は中学校の3年間でこの言葉が大好きになりました。

2年前、私がバレーボール部に入部したばかりの頃。バレーボール部のこんなきまりを知りました。それは、先輩にボールを渡すときはお願いしますと言うこと。私はこのきまりを守り、未熟ながらもボール拾いの仕事をしていました。しかし、私がボールを拾ってお願いしますと言って先輩に渡しても、ありがとうと言ってくれる先輩とそうでない先輩がいました。最初の頃は、

「部活ってそういう厳しい世界なのかな。」

と同じ部活動の同級生と話していました。しかし、日に日に私の心には疑問が積もっていきます。

「お願いしますとありがとうはセットではないの？」

「ありがとうと言うのに、先輩後輩が関係あるの？」

部活動において、“お願いします”は義務なのに“ありがとう”は言っても言わなくてもいいというのはおかしいのではないかと思いました。

月日が経ち、私は2年生に進級しました。私たち2年生は初めての後輩を迎えることになるのです。私は1年生の頃の経験から、自分の目標を決めました。それは、何かしてもらったら絶対にありがとうと言うこと。この目標を胸に、私は先輩、後輩、同学年、先生に、常にありがとうを欠かさないでいました。そうしているうちになぜだか私の心が満たされるようになっていきました。部活動もなんだか充実してきたように感じました。不思議なことですが、嘘ではないのです。

そして、迎えた3年生。先日、大会も終わり無事引退することができました。その際に1、2年生から手紙を貰いました。私はその手紙を読みながら、ハッとさせられたのです。「ボール拾いの時に笑顔で“ありがとう”と言ってもらえてとても嬉しいです。少し部活のことで悩んでいる時に、感謝の言葉を言ってもらって、すごく身に染みました。」

私が言ったありがとうが、自分自身を満たすだけでなく、言われた人の心をも、満たしていたなんて。私はとても嬉

しかったです。ありがとうと言い続けて来て良かった。たった五文字だけど、やっぱり魔法の言葉だな。そう思えました。

また、ありがとうの効果はそれだけではありません。例えば、部活動の大会で自分がミスしてしまったとき、少しチームの空気がどよんとなっている中でチームメイトが、

「大丈夫だよ。」
と声をかけてきてくれました。そんなときあなたは何と返答しますか？昔の私ならば、

「うん。ごめんね。」

と言っていました。しかしそれではチームのどよんとした雰囲気を変えることはできません。だから私は、

「次はこうするね。ありがとう！」

と言うようにしました。すると、自分の中でも、チームの中でも気持ちの切り換えができたのです。ごめんね。をありがとう。に置き換えてみるだけで、気持ちをリフレッシュすることができる。そんな効果も、部活動を通じて発見することができました。

私はこのような経験から、ありがとうを日常生活でも沢山使うようになりました。エレベーターで自分が降りる際に、開くボタンを押してくれたとき。物を取ってもらったとき。狭い通路を歩こうとして譲ってもらったとき。このように些細なことでも、ありがとうと言える機会があふれています。ありがとう。と言うのに年上も年下も、目上も目下も、国境も性別も関係ありません。私はこれからもずっと、この魔法の言葉が大好きです。

奨励賞（神奈川県立青少年センター館長賞）

「誰か」を「自分」に

「大人って、こどもだなあ」これは、私が駅のホームで見つけたポスターの言葉です。一緒に、電車で目の前につえをついてヘルプマークをつけたおばあさんや、マタニティマークをつけた妊婦さんが立っているのに席を譲らない大人達をこどもが見ているという絵が描かれていました。このポスターは注意喚起の為のものなので、「大人は席を譲らない。」という訳ではありません。しかし、このポスターの絵のような状況は実際にあると思います。自分が座ることしか考えていないような「大人」もいるのです。電車には、お年寄りや体の不自由な方、妊娠中の方々の為の「優先席」があります。皆さんは「優先席」があいていたら、座りますか。大人でも子供でも、何も気にせず座る人も座るのをためらう人もいると思います。座る派の人の意見としてネット上で、「席を譲る人が誰もいないから、お年寄りがきた時に譲ってあげるための席をあらかじめ自分がとっているんだ。」と言っている人がいました。この意見も一理あるとは思いますが、それでは見た目では分からないけれど、凄く体調が悪い人が乗ってきたとしても気づいてあげることができず、席を譲ることができません。この意見だと、その人の主観だけで譲る人と譲らない人を分けることになってしまいますよね。席を譲るという行為自体、主観だけで判断していると言われてしまえばそれまでですが、もう少し、それぞれの気持ちや伝われればこんな回りくどいことをしなくても一人一人が電車内で気持ち良く過ごせると思いました。このような考えはすでにあり、その具体的な例がヘルプマークやマタニティマークです。その2つがあることで、見た目では分かりづらいけれど助けが必要な人にそれぞれで気づくことができます。席を譲った方がいい人の中に「大きな怪我をした人」もいます。怪我をした人はギブスをしていたり、松葉杖をついていたり、目立ちます。私は今年の5月頃、通学中に駅の階段から落ちて足の靭帯を損傷しました。幸い骨折には至らず松葉杖は使っても使わなくても良いとのことでした。少し歩行に影響があったので私は使わせていただいたのですが、その際にリハビリの先生から松葉杖は使えるなら使った方が、周りの人に

横浜共立学園中学校 3年 木村 玲菜

注意してもらえると教えてもらいました。確かにサポーターだけより松葉杖をついている人の方が、見ているこちらが気をつけようと意識できますよね。ヘルプマークやマタニティマーク、松葉杖といった道具は、電車内で最も注目し、注意すべきアイテムだといっても過言ではないと思います。朝や夕のラッシュ時、そのようなアイテムをつける人々にとって一駅立っているか座っているかだけで身体への負担は大きく変わります。それぞれでそのような人々が今、自分が乗っている電車、車両内にいないか、確認する必要があります。それに加えてマタニティマークを目立つ所に付けるなど、席を譲ってもらう必要があるという意味表示をしっかりとすることも、大切になります。冒頭でお話した通り、「大人」には席を譲らない人もいます。「大人って、こどもだなあ」からもわかるように、席の譲り合いの大切さはこどもでも理解できるような簡単なことです。それなのに注意喚起のポスターが作られるほど譲り合いができていないのはなぜでしょう。私が思う、一番の理由は考えることができるようになったからです。考えることができるようになったからこそ、席を譲ったけれど断られてしまった時のことを想像して、怖くなる。考えることができるようになったからこそ、自分がやらなくても他の誰かがやってくれるんじゃないか、周りのみんながやっていないんだから自分一人がやる必要はないのではと、悪い方に傾いてしまう。でも、考えることができるようになったからこそ、他の誰かがやってくれるかもしれないことでも「誰か」を「自分」に変えるだけで手に入る、その先の「ありがとう。」の喜びを想像することができるようになったのです。

「大人って、こどもだなあ」これは、私が駅のホームで見つけたポスターの言葉です。こんな注意喚起のためのポスター、なくてもみんな当たり前前やってるよ、と、誰もが思えるよう、自らの意識を変えましょう。それが一人一人が気持ち良く過ごせるようにするための絶対条件だと、私は考えます。

奨励賞（神奈川県立青少年センター館長賞）

「男性ですか、女性ですか」

私は人に秘密を隠している。それは、私は自分の性別が分からない、クエスチョニングであることだ。クエスチョニングはLGBTQ+のQで、自分自身の性別が分からないという意味である。世界でLGBTQ+の認知度は低く、周りに自分を理解してくれる人がいるのか分からず、不安で、自分がクエスチョニングであることを人に隠している。

私は家族構成が男一人女三人ということもあり、男女を区別しない家庭で生活している。なので、「男だから。」「女だから。」という理由に関係なく、重い荷物を持ったり料理をしたりしている。小学生の時は、女の子と折り紙をしたり男の子とドッチボールをしたりして過ごしていた。だから、性別に関係なく、みんな平等に同じように接していた。その後、女子校に入学し、周りの友達が女子だけとなり、男性と話す機会は、数人しかいない男性の先生だけで、ほぼ無くなった。中一の時、「俺のスカートどこ行った」というドラマを観ていた。主人公がゲイ（男性同性愛者）で、そこで初めてLGBTという単語を知った。だが、特にLGBTに興味はなく、他人事だと思っていた。

しかし、中一の秋、習っていたバレエをやめ、髪をバリバリ切った。すると、見た目が男子になり、喫茶店や病院・道で「お兄ちゃん」と呼ばれることが増えた。それから、自分を男の子だと思い始めた。結果、自分の性別が分からなくなった。それ以来、性別を記入する際、男女のどちらにマルを付ければ良いのか分からなくなった。女にマルを付けたら男にマルを付けたら、マルを付けなかったら。毎回、どうすれば良いか迷うようになった。時には、性別欄を見ると、恐怖を感じることもあった。今回の作文の応募用紙にマルをどちらに付けようか迷った。なので、「ここは女子校だ。」と自分に言い聞かせ、女にマルを付けた。

現在、世界は多様化し、男女のどちらかと言えない人が増えている。しかし、「男性か女性かを聞かれる」ことは、当たり前のように日々行われている。アンケートに答えようと思えば性別欄があり、会員などになる際の申込書でも男女のどちらかにマルをつける。これは、性自認と身

横浜共立学園中学校 3年 栗原^{くりはら} 沙和^{さわ}

体の間に違和感のない人にとっては、ほとんど意識しないことかもしれない。だが、私のように性別を記入する際どちらにマルを付ければ良いか悩んでいる人も少なくない。また、それを苦痛に感じている人もいるはずだ。そうした人たちは、もう自分を苦しめないでほしいと思っている。

世界は多様化したけど、社会は何も変わらない。だから、私が提案する。男か女かの性別で区別する社会を終わらせるために。性別記入欄にある男女の他に「その他」を設ける、もしくは性別の記入を任意にする、のはどうか。「その他」の選択肢を設ければ、男女の二択でなくなり迷う機会が減る。性別の記入を任意にすれば、記入の義務から解放され性的少数者にとって、心の負担が軽減する。

また、現代社会で女性・男性の二択が当たり前になっていることは、社会が性の多様性に気付いていない証拠だ。だから、社会が性の多様性に気付いてほしい。そのために、LGBTQ+に関するCMを制作するのはどうか。CMはテレビを見れば必ず見るものなので、幅広い世代の人が見ることができる。だから、LGBTQ+を知るきっかけとなり興味を持ち、性の多様性を理解する人が増えるのではないかな。

現在、このような取組みとして、フェイスブックの英語版で50種以上の性の選択が可能になった。この50以上の選択肢は、自分を表現する重要な選択肢であると同時に、「女性」「男性」の二種類の人しかいないという誤った固定観念を破り、社会に多様性を気付かせるものだと思う。だから、素晴らしい取組みだ。また、この取組みが性の多様性の理解の第一歩となり、社会全体がこれを実践し、性の多様性の理解が深まり、社会が変化していくことを強く望む。

私たち性的少数者がイベントやパレード・講義会に参加して、どんなに行動し、努力しても周囲の人の理解が一番大切だ。だからこそ、一人一人が性の多様性を理解し、男女の区別をなくすことに努力し、実現し、そして、一人一人が輝くことのできる社会になることを願っている。

奨励賞（神奈川県立青少年センター館長賞）

わたしは私になりたい

神奈川県立相模原中等教育学校 3年 こいずみ てんか 小泉 天佳

変わり者になりたい。
皆とは違うことをしたい。
人気者になりたい。
テレビに出てみたい。
誰かに褒められたい。

幼稚園生の私はテレビが友達だった。テレビに映る人は何か秀でていたり周りとは違う何かを持っていたりしてそれがとても格好よく見えた。周りの大人は皆テレビに映る人を褒めちぎった。私もテレビに映りたい。私もすごいって言われたい。幼い私の夢はそんなものだった。幼稚園を卒園する時、私の夢は消防士になりたい、だった。5歳の時に亡くなった父が消防隊に所属していたからである。亡くなった父の背中を追って消防士になれば格好よくなれるのではないかと、褒めてもらえるのではないかと、という下らない理由だった。小学校を卒業する時、私の夢は総理大臣になる、だった。きっかけは先生に未来の総理大臣だね、と褒められたこと。周りの人は皆、背中を押してくれた。それが嬉しくて仕方なかった。どの夢も理由は不純だ。でも、どんな夢を語る私も輝いていたはずだ。今の私は輝いているだろうか。中学3年生になった私の夢はなんだろう。消防士、総理大臣、いいや、きっと違う。私の未来はどこにあるのだろうか。

そんな事を考えていたある日、私は体調を崩した。前日から頭痛が酷く吐き気が止まらなかった。熱は出なかったものの2日間寝込み誰かに連絡する元気はなかった。体調が回復し携帯を確認すると友達から連絡が入っていた。「体調悪そうだったけど大丈夫。」「明日連絡するから今日はゆっくり休んで。」普段はふざけ合っている友達から連絡が入っていてとても嬉しかった。次の日学校に行くと無理しないでねと声をかけてくれた友達がいた。今までも友達の優しさや大切さは理解しているつもりでいた。でも今回知った友達の優しさは想像以上で言葉にできないくらい嬉しかった。心配をかけた友達にお礼を言うと私もいつも助けて貰ってるからお互い様だよ、と笑ってくれた。その優しさが心に染みた。私はこんな人になりたかった。今までも沢山のの人に迷惑をかけてきた。でも

今回は笑って許してもらうことができた。そしてそんな友達が沢山いてずっと仲良くしてくれる。こんなに幸せな事があるだろうか。確かにテレビに映る人はすごい人で、そんなテレビに映ることができたらそれはすごいことだと思う。けれどテレビに映らない人が素晴らしい人ではない、なんてことは絶対にない。夢を叶えられなくても、何かを途中で諦めてしまっても格好悪いなんてことは決してない。どんな人でもいい所があって格好良い所があって誰かに褒められるなんて容易いことなんだ。今なら分かる。幼い頃から私は誰かの笑顔が好きだった。皆に笑っていて欲しかった。その具体的な策が消防士や総理大臣になることだったのだと思う。でも本当はそんなことを考えなくても周りの人は笑ってくれる。私がおはようと声をかけるだけで笑顔になってくれる友達が沢山いる。私の夢はもう叶っていた。気がつかないだけで、ずっと前から。

私の周りにはまだまだ目を向けられていないことが沢山ある。今度はもっと早く気づけるように、もっと胸を張って生きていけるように今まで以上に沢山のことを経験したい。今まで自分に自信が持てなかった私だけど、隣に友達がいると思えばなんでも出来るような気がしてくる。

テレビに映らなくても、消防士にならなくても、総理大臣にならなくても私は輝ける。

奨励賞（神奈川県立青少年センター館長賞）

なくなっほしいこと

伊勢原市立山王中学校 3年 ^{さくらだ} ^{りお} 桜田 璃央

『いじめ』これは何故起こるのか。私は不思議ではない。ニュースでもいじめで亡くなってしまった学生を多く見る。いじめている側の人はどんな気持ちで見ているのだろう。

去年の中学2年生、私は初めていじめを体験した。それは心にくる言葉のいじめだった。きっかけはよく分からないもので、私が何かに似ていたらしくそれが男子のグループの中で広まってしまったらしい。私のクラスにいた人はそのグループの中心にいるような人でクラスでは私の悪口まで言っていた。元々その人は私の事をよく思っていない人で1年生の時から私のいないところで悪口を言っていた。1年生の時は気にしていなかったけど、やっぱり直接言われるのはきついと感じていた。どんどん私の心は傷ついていき、次第には言ってもいない友達への悪口も広められていった。言った覚えはないから、なぜ避けられているのか、怒っているのか初めは分からず不安でいっぱいだった。友達から理由を聞いた時、頭が追いつかなかった。

「そのクラスの男子が言ったらしい」

と聞きまさか友達との関係まで壊されると思っていなくてそこでやっと自分の考えの甘さに気付いた。先生に頼りたくはなかったから、いつも友達に相談していたけれど、一緒にいるだけで

「あいつなんであそこいるの？w普通に場違いじゃんw」と言われるようになり、居場所が無くなってしまった。さすがにもう耐えられなくなり、保健室の先生に相談することにした。親身になって私の話を聞いてくださって、本当に心の支えになっていて、何とか教室で過ごすことはできた。そんな中道徳の授業、題材はいじめだった。意見交換の時に聞こえた会話で私の中の何かがかくずれた気がした。

「まじいじめとか言った方が勝ちとかいうけどそれはまじで違う。先生に言うのはまじで負けw」

一瞬間を言っているのか分からなかった。こっちがどんな思いをしているのか、貴方の言葉にどれだけ苦しめられているのか、全然自覚がないようで泣きたくなった。

「何で自分だけ」何度もそう思った。教室にいて姿を見るだけでも辛かった。ついに授業を1時間休んでしまった。先生は指導してもらった方が良くないかと提案してくれたけど、また何か言われると思ひ躊躇した。だけど先生は私のことを考えて私が嫌な思いをしないように指導してくれた。友達とも仲直りができて少しずついつも通りの学校生活が戻ってきた。

私は先生を通して解決することができたけど、自分一人ではまだ何もできないことを思い知らされました。大人に頼る事が苦手な私を助けてくれて本当に感謝でしかありません。いじめられると助けを求めるのがとても難しいことを体験して、きっと他の子も感じているだろうと思った。ニュースで見るといじめの内容は胸が痛くなるものばかり。そんなニュースが、悲しむ人が少なくなっほしいと思う。困っている人がいたら、泣いている人がいたら手を差し伸べたい。話をきいてあげたい、救いたいと思う。

奨励賞（神奈川県立青少年センター館長賞）

二人の私

「私は誰？」だれでもいいから教えて。
私は小学二年生のとき、ある事をきっかけとして、自分をうしなってしまった。いままでの私はどんなだったのかが、よく分からなくなった。それいらい私は、「本物の私」が何者なの分からなくなってしまった。

本物の私がいなくなったからには、仮の自分を作らなくてはならない。そして私は、今日まで、「偽物の私」として生きてきた。しかし、偽物というのは思っていた以上に難しかった。

昔、私がまだ小学生だったころ、クラスメイトに「下田ってみんなちがうよな」と言われた。そのころの私の頭の中は？でいっぱいだった。人間はみんなちがうのに、全員同じじゃないのに、なんで。なんで私だけが、仲間はずれみたいに言うの。とずっと思っていた。クラスメイトの言った言葉がまるで、刃物のように思えた。そして、その言葉の刃物は一突きにして、私の心をぐちゃぐちゃにした。ガラガラガラという効果音がピッタリだと思った。それほどぐちゃぐちゃにくずれおちてしまったのだ。それいらい私は、あまり積極的には行動せず、周りの人間ともあまり親しくなりすぎぬようにした。自分は偽物だから、本物の人間より一歩ひこうと思っていたから。

そんなこんなで卒業、入学し、またスタートラインに立つ日が来た。とは言うものの、私はスタートラインにすら立てないけれど。中学校には、まだ知らない人がたくさんいた。また、あれをくり返さないように気をつけていたせいで、あまり知りあいをふやせなかったけれども、私は満ぞくできるようにがんばろうと思えた。

しかし、問題があった。それは、あの言葉のことだ。あれいらい、ちょっとしたトラウマのようになってしまい、「普通じゃない」「おかしい」などの言葉を聞くと、ドキッとする。胸のあたりがキューとしめつけられるようなかんじがして、とても苦しい。けれども、偽物の私が、「苦しい」や「辛い」など言えるはずもなく、笑顔で笑いながらなんとかやりすごす。というのが、たった一つの対処法だった。しかし、何度もそううまくはいかず、とりみだすことも。そんな中、私は一つの空想の曲を知った。小説の

相模原市立上溝中学校 1年 ^{しもだ}下田 ^{あおい}葵

中の曲でタイトルは、四人なら恋なんていらぬ。そこにはこうかいてあった。「毎日が変わってしまった。もういつもみたいに笑えない。ひとり輪の外にいるみたい。苦しくて、孤独で辛くてつぶれそう。お願いだれか助けて今すぐ。」最初に見たときは驚いた。私の心の気持ちと、とても似ていたから。自分が何者か分からず、刃物のような言葉に苦しめられる日々。もしも、あのとき、本物の私をうしなわなければどれほどよかったことか。こんな苦い思いをしなくてよかったのか。私は、仲の良い友達をつくれたのだろうか。私は、みんなと同じスタートラインに立てたのだろうか。私は、人と本音をかたり合えたのだろうか。私は心から笑えただろうか。苦しい現実と、輝かしい理想。理想はもうかなわないけど、この苦しい現実なら、ねじまげることができるかもしれない。本物の私と偽物の私。全くちがうのに、二人とも私。迷子になった私と嫌われ者の私。全くちがうのに、二人とも私。いまさらかもしれないけれど、偽物で嫌われ者の私も、私なのだから。

あの曲を見つけてからここに来た。もし、見つけてなかったらもっとちがったのかもしれない。でも、どっちに転んでも、私の人生。私が「こっち」と思ったほうに進もう。きっとその未来は明るく塗り替えることができるから。現実逃避はもうやめて、もう自分はいなくならないから、未来を自分色に塗り替えよう。そう心に誓い今日もまた進んで行く。どんないやなこと、1つの思い出として。

奨励賞（神奈川県立青少年センター館長賞）

僕が感じたこと

慶応義塾普通部 1年 ^{たに}谷 ^{あつひろ}淳広

僕には関西に住む叔父さんがいる。お腹がぼっこり出ている、いつも遊んでくれる穏やかな存在だ。その叔父さんに先日大変なことが起きた。母から「関西の叔父さんの心臓が止まってしまい、今、病院にいるらしい」と言われた。僕は何が起きたのかわからず、動揺した。

叔父さんは、自転車に乗って早朝のお散歩に出ているらしい。その時に心臓が止まってしまい、自転車とともに倒れていたようだ。倒れていた道は、普段は小学校の通学路だったがその日は休日だったこともあり、子どもはおろか人通りは皆無だった。国道から一本奥に入った道で、しばらく誰にも気付かれず倒れていた。そこに、たまたま国道を通りかかったタクシーの運転手の方が、倒れた自転車が視界に入ったような気がする、とわざわざタクシーを停めて様子を見に来てくれたのだ。そして、叔父さんが倒れていて意識がないことがわかると、大きな声で人を呼んで救急車の手配を依頼し、自身はタクシーにAEDを取りに走ってくれた。そのタクシーにはAEDが乗せてあり、救命訓練を受けていた運転手の方は、救急隊員の方の指示を仰ぎながら措置を行ってくれた。おかげで、救急車が着くころには叔父さんの心臓がもう一度動き出したということだ。後からわかったことだが、防犯カメラの映像を分析した結果、叔父さんが倒れていたのは5分を超えていたようだ。一般的に、心停止から5分が経過すると、救命率は25%まで低下し、8分を超えると、救命の可能性は限りなく低くなる。また、救急車の到着には平均7.7分かかることを考えると、タクシーの方の救命措置がなければ、蘇生する可能性は無かったと言えるだろう。しかも、適切な処置が素早く行われたこともあり、叔父さんは何の後遺症も残らなかった。担当医も、奇跡に近いと話していた。

ニュースなどで、人命救助に協力したということで表彰される方を何度か目にしてきた。僕はそのニュースを横目で見ながら、どこか違う世界を見る気持ちでいた。今回、AEDの重要性を心底感じた僕は、以前小学校で受けたAED講習を思い出してみた。その内容はこんな感じだ。倒れている人を発見したら、まず呼吸の有無を確認す

る。呼吸が無い場合は、大きな声で周りの人に助けを求め、救急車の手配を依頼する。自身は直ちに胸骨圧迫を行いながら、AEDを使用する。叔父さんを助けてくれた運転手の方は、この通りに模範的な動きをしてくれていた。運転手の方を心から尊敬するとともに、僕は不安になった。僕が日常生活を送る中で倒れている人を見ても、すぐに行動できるだろうか。実際には身体が動かないのではないだろうか。叔父さんを助けてくれた方は、「AEDについては、無我夢中で習った内容をやっただけです。車を停めて様子を見に行っただけで、この辺りが高齢者が多いので、少し気になったからです。」とおっしゃっていた。僕は気がついた。僕もAED講習を受けたが、「自分ごと」として考えられていなかったんだということ。運転手の方は、高齢者が多く住む地域を走るタクシーなので、使う機会があるものとして、つまり「自分ごと」としてしっかりと講習を受けていたのではないかと。そして普段から行動に移すことを頭に入れて生活していたのだ。僕はみんなと一緒に講習を受けたが、いつ使うかもわからない知識として頭に入れていたのだ。

今回、叔父さんの心臓が動き出したこと、あの日タクシーの運転手さんが奥の道まで様子を見に来てくれたこと、周りの方がすぐに救急車を呼んでくれたこと、運転手の方がAEDを素早く使ってくれたこと、救急隊員の方が命を繋いでくれたこと、すべては幸運が連鎖した奇跡、と言えます。奇跡を起こしてくださった方すべてに感謝の気持ちを表すと共に、僕自身がこれから同じような場面に遭遇した時には、しっかりとした行動に移せるようにしたい。その為には、日々学ぶことを「自分ごと」として捉え、生きた知識として蓄え、自信を持って生活していかなければならない、と強く感じています。

奨励賞（神奈川県立青少年センター館長賞）

織りなすグラデーシヨンの世界

昨年の夏休み、私は十年ぶりに保育園の頃の友人と会いました。髪を短く切り、今流行りのメンズ雑誌から飛び出したような大好きな服を身にまとい、心ワクワクと出かけました。その姿を見た一人が「何？その格好、男みたいじゃないか。少しは女らしくしろよ。」と笑いました。仲の良い幼馴染みに言われたことに嫌悪感を感じ、心がモヤモヤしました。それ以来、自分の着たい服や、好きな格好をすることをためらうようになりました。

このような経験、みなさんにもありませんか？私は、「男らしく。女らしく。」という言葉を目にする度「なぜ決めつけるの？」と違和感を覚えます。

私には二つ下の弟と、年の離れた妹がいます。「男のくせに泣かないの。」「そのピンクのスカート、女の子らしくてかわいいね。」など我が家でもよく聞かれる言葉です。

小さい時から「戦隊ものヒーロー」が好きだった私は、弟の変身ベルトを奪い、剣を振り回し、よく弟を泣かせました。「私も変身ベルトが欲しい。」と母に言うと、答えは決まって「あなたは女の子でしょ。」でした。ただただ弟がうらやましく思えたことは、今も鮮明に心に残っています。

日本に古くからある「男らしさ」「女らしさ」という固定概念は、ある場面では大切に継承していきたいものです。しかし、それ以上に「自分らしさ」「その人らしさ」という言葉はとても素敵なのではないでしょうか？男である前に、女である前に、私たちは同じ人間です。誰かと違うことは決して悪いことではありません。

この夏、東京オリンピックが開催されました。私たちに夢と希望と勇気を与えたオリンピック。さまざまな話題の中に、ジェンダー問題がクローズアップされていたことは、みなさんの記憶に新しいことでしょう。

ジェンダーとは、「社会的、文化的に作られた性別であり、社会の中での男女の差」を意味します。日本はジェンダー格差がとても大きい社会といわれています。その原因は、性は男女二つだけに限るという認識。そして、婚姻は異性という、人の心に根付いた社会の風潮なのです。

性に違和感を覚えている人を性的マイノリティといい、

横浜市立大鳥中学校 3年 ^{ふるや}古谷 ^{あおい}葵

昨今話題になっているLGBTも含まれています。人口の5~8%の割合といわれ、何と私たちの周りには15人に1人いることになります。

性はたった二つだけではなく、グラデーシヨンのように少しずつ違うのです。他人の色を知り、自分の色を広げ、それぞれの価値観で、美しいグラデーシヨンの世界を織りなしていきたいものです。

私は今年、インターネットを駆使し、自分自身でプロジェクトを立ち上げました。そして、中学生の視点からジェンダー問題を世界に発信しています。そこで、世界中のいたるところに、ジェンダー問題が重く重く横たわっている現実を知りました。また、自分の性に悩み、苦しみ、生きることをためらう仲間がたくさんいることを、目の当たりにしました。

その中で、「私たちは自分の可能性を、性や性別であきらめてはいけません。寛容な心で未来を切り開いていくのだ。」と実感しました。このうねりを一つの力として、私の行動で世界を動かしていこうと決意しました。

未来を生きる私たちの使命は、「誰もが自分らしくありのままに生きられる社会を構築すること」なのです。

私は、強くしなやかなグラデーシヨンの世界を織りなす担い手となります。

奨励賞（神奈川県立青少年センター館長賞）

「見えない傷」

伊勢原市立山王中学校 2年 ヤマノ アドリアナ

誰にでも転んだりぶついたりして傷が出来るという経験があるかと思います。ばんそうこうとか貼ると、血は止まり、かさぶたとなり、時間が経てばたいいの傷なんかは消えると思います。だけど心の傷は一生消えることがなく忘れることもないものだと思います。

心の傷というのは、他人の言動により出来てしまうものだと私は思っていて、暴行や悪口といったいじめ、差別などが心の傷につながると思います。もちろん大事だけが心の傷になるのではなく、ささいな事でも心の傷に変わることがあり、例えば私は外国人です。肌が黒く日本にはない名前をしています。そのためうんこやドリアンといったあだ名で呼ばれることがありました。私はそんな風に呼ばれてとてもいやな思いをしました。私は自分の意見をはっきり言える方だったので、そんな名前と呼ばれるのいやなんだよねと正直に言いました。そこからはもう呼ばれることはなかったのですが、今でもそのあだ名で呼ばれてとても傷つきいやな思いをしたということを忘れられません。このようにあだ名で人を傷つけられるのです。いくら仲が良くても変なあだ名で呼ばれるのはとても傷つくはずです。さっきも言ったように、私は自分の意見をはっきり言えたから、変なあだ名で呼ばれることはもう、なくなりましたが、自分の意見が言えない人は、ずっと変なあだ名で呼ばれ、ずっと傷が付きっぱなしです。きつと言ってる側からしたら面白いとか思ってるかもしれないけど、言われてる側からしたら、とても苦しくて、つらいということを知ってもらいたいです。もちろん、ささいなことはあだ名だけではないですし、身近なことで誰かが傷ついているかもしれないです。それに気づいた周りの人がどう対応するかにもよって、その子の未来も大きく変わると思います。変わったからといって、あやまったりしたからと言って心の傷が消えるわけではないです。私の母が私に教えてくれたことがあって、まずきれいな白いかみを手に持ち、母が私に向かって、悪口を言いなさいと言われたので私は、「デブ」「ブス」「おこりんぼう」「こぶた」などと言った悪口を言いました。すると母は言われるたびに、紙をくしゃくしゃにしてしまい、最後

には、紙を丸くしてしまいました。すると母は、この紙を広げてと言ったので紙を広げました。すると母は、元のきれいな紙には戻らないでしょと、紙を心に例えて教えてくれました。確かに、クシャクシャの紙を元のきれいな形に戻すのは無理でした。このように、悪いことをしてあやまるのは、とうぜんだと思いますが、だからと言って心の傷が消えるわけではないです。だから、そもそも暴行や悪口といったいじめや差別をしなければ良いのではと思っています。そういったことは、環境が変わらない限り、減らないと思っています。ベストは暴行、悪口といったいじめ差別をしない。見たら見てみぬふりせず、大人の人達に言ったり、相談に乗ってあげたりして、少しでも減るはずだと思います。相談に乗るだけでも、心の傷が消えるわけではないけれど、大きな助けになると思います。

最初にも言ったとおり心の傷は、一生消えるものではないと思います。

だから、転ばないようにするには、足をしっかりあげて歩くように、いじめや差別がなくなれば心に傷がつく人も減り、時間が経っても、毎日が楽しいと思えるものだと私は思います。

<参考> 「少年の主張全国大会」 内閣総理大臣賞

認め合うことの大切さ

岐阜県 養老町立高田中学校 3年 細川 士禾

みなさん、もしあなたが、片腕のない人を見かけたら、どうしますか。声をかけますか。それとも、かけませんか。もし、あなたがお子さんと一緒にいるときならどうですか。

「見ちゃだめだよ。」そんな声をかけますか。

僕の妹には、生まれつき片腕がありません。そのことで、妹はたくさんの辛い思いをしてきました。

—「あの子、手がないよ。」

今年の春、妹がある女の子から言われた一言です。妹は、どうしていいか分からないと、戸惑いと悲しみの表情を浮かべ、僕たち家族の前でわんわんと泣いていました。その姿は今でも僕の目に焼き付いています。それを見た母も、本当に苦しそうでした。まるで何もしてあげられない自分を責めるかのように、ただ泣いていました。そのときのことを思うと、胸がぎゅっと締め付けられます。ただ、みなさんに知ってほしいことは、妹は、このような経験を何度もしてきたということです。

そうした中、僕は自然と考えるようになっていました。もし、自分が、逆の立場だったらどうするのだろうと。妹と同じように、片腕がない人がいたら、足がない人がいたら…、僕はどうするのだろうと。

きっと、「見てしまう」と思います。なぜでしょうか。答えは簡単です。「自分と違うから」です。時に、「違う」ことは、問題を引き起こす原因にもなり得ます。しかし、「違う」と認識すること、これは、差別なのでしょう。そもそも今年の春、妹の手がないと言った女の子。彼女に、相手を苦しめようとする意志はあったのでしょうか。きつと答えは、「NO」です。

僕は思います！僕たちはいつからか、「差別をしないこと」＝「何もしないこと」、ひいては、「目を背けること」だと、大きな勘違いをしているのではないかと。冒頭で話した、「見ちゃダメだよ」という発言も、このような勘違いから生まれた言葉じゃないでしょうか。

違いを認識し、見て見ぬふりをする、そして、何もしようとしないうこと、これこそが、大きな問題だと、僕は

思うのです。なぜなら、僕たち人間は、違いを知るからこそ、その先のことを考えることができるはずだからです。

それから僕は、妹にかける言葉が変わりました。

「見られるのは当たり前だよ。だってさ、自分と違うんだから。」聞いた妹は、少しきょとんととして、僕の顔を見つめていました。

僕も妹も母も、辛い経験を多くしてきましたが、考えの一つで、こんなに大きく傷付くことはなかったのかもしれませんが。相手は違いを認識しただけ。その先が何よりも大事です。僕たちも、もしかしたら、スタートラインに立っていなかったのかもしれない。

妹のおかげで、僕は大切なことに気付けたような気がします。差別とは、考えることをやめ、相手から目を背けることなのです。ですから、「見ちゃだめだよ。」に代表されるような言葉は、一見相手を思いやっているようにも見えますが、考える機会をただ奪うことにもつながりかねない、上辺だけの言葉なのです。ですから、僕たちは、まず、その人らしさを認め、違いを受け入れ、その上で、その人にとってどんな行動や考え方が必要なのかを考え、見つけ出していくことが、何よりも大切なのです。

妹がいてくれたからこそ、僕は目を背けず、考えることができました。

妹がいてくれたからこそ、僕は相手の気持ちを考え、行動することができました。

今の僕があるのは、まぎれもなく妹のおかげです。本当にありがとう。僕は、これからも、妹が、そして、全ての人が、心から笑ってられるように、目を背けず考え続けます。その先に、差別のない社会があると信じて。

実施概要

1 目的

中学生が、日常生活の中で考えていることを作文にして発表することを通して、広い視野と柔軟な発想や創造性を養い、物事を論理的に考える力や自らの主張を正しく伝える力などを身につけることを目的とする。

2 主催

神奈川県

3 後援

神奈川県教育委員会 神奈川新聞社 **NHK**横浜放送局 **tvk**
神奈川県青少年育成アドバイザー連絡協議会

4 対象

神奈川県内在住・在学の中学生（国籍は問わないが、日本語で発表できること）

5 応募期間

令和3年6月1日（火）～9月6日（月）

6 発表大会

- (1) 期日 令和3年9月26日（日）14:00～16:15
- (2) 会場 県立青少年センター スタジオ HIKARI
- (3) 内容 作文発表（優秀賞以上の7人） アトラクション 表彰

7 選考

- (1) 作文審査（事前審査）
審査会において作文発表大会出場者と奨励賞受賞作文を決定
- (2) 発表審査
作文発表大会において、最優秀賞と各優秀賞を決定

（審査委員）

神奈川新聞社編集局報道部	大槻 和久
神奈川県青少年育成アドバイザー連絡協議会会長	佐藤 節子
神奈川県公立中学校長会	小番 奈緒美
神奈川県教育委員会子ども教育支援課長	古島 そのえ※当日代理 本間隆司
神奈川県立青少年センター副館長	立石 えり子

8 表彰

- ・最優秀賞（神奈川県知事賞） 1名
- ・優秀賞（神奈川県教育長賞） 1名
- ・優秀賞（神奈川県福祉子どもみらい局長賞） 1名
- ・優秀賞（神奈川新聞社賞） 1名
- ・優秀賞（NHK横浜放送局長賞） 1名
- ・優秀賞（tvk賞） 1名
- ・優秀賞（神奈川県青少年育成アドバイザー連絡協議会会長賞） 1名
- ・奨励賞（神奈川県立青少年センター館長賞） 10名

9 応募状況

- ・応募者総数 920名
- ・参加学校数 36校

令和3年度「中学生の主張inかながわ」記録集

編集・発行

神奈川県立青少年センター

〒220-0044

横浜市西区紅葉ヶ丘9-1

電話 045-263-4466

ファクシミリ 045-242-8190

HP : <https://www.pref.kanagawa.jp/docs/ch3/index.html>

本記録集の無断複製、転載等は禁止いたします。

表紙デザイン 神奈川県立茅ヶ崎北陵高校 2年 足達 裕菜 さん

令和3年度「中学生の主張inかながわ」記録集

編集・発行

神奈川県立青少年センター

〒220-0044

横浜市西区紅葉ヶ丘9-1

電話 045-263-4466

ファクシミリ 045-242-8190

HP：<https://www.pref.kanagawa.jp/docs/ch3/index.html>

本記録集の無断複製、転載等は禁止いたします。